

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
先	セン さき まず								光明皇后 薬師論
兆	チョウ さざし さざす								王勃詩序
克	コク かひ よい								夔魯指歸

【兆】古代から現代まで書かれてきた字体は、説文篆文ではなく、説文古文の字体に近い。
 【克】説文篆文の字体を楷書や明朝体にしても「克」にはならない。説文解字には古文が2例載っている。康熙字典には古文が5例載っている。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
先	先	先	先	先			先	先	先	先	先	先
粘葉本朗詠	節用	凡4										現代中国
兆	兆	兆	兆	兆			兆	兆	兆	兆	兆	兆
尊門親王	節用	凡4										千祿<通> 現代中国
克	克	克	克	克			克	克	克	克	克	克
粘葉本朗詠	節用	凡5										現代中国
		古文										
		古文										
		古文										
		古文										
		古文										

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
兎	シニ								鹿野指歸
兒	ゲイ シニ								鹿野指歸
兔	トウ うさぎ								鹿野指歸
免	メン まぬかれる 炒るす								杜家立成
党	トウ なかま								鹿野指歸
兜	トウ かぶと								鹿野指歸

【兎】上部の「白」を早書きしてくずすと「旧」になる。「兎」は「儿」部の6画。

【兔】甲骨文にはたくさんの例があるが、6種類だけ紹介。金文の例がみえない。「兎兔免兔免兔免兔」などたくさんの異体字があるが、もっとも多く書かれてきたのは「兔」。五経文

字では「兔」の最終画が点ではなく横線。康熙字典では「兔」を本字とし、「兎(兎ではない)」を俗字とする。「兔」は中国では明代に書かれはじめたようだ。江戸時代は「兔」の使用例が多い。弘道軒が見慣れない字体を採用しているが漱石の字体も同じ。明治時代には普通に書かれていた字体なのかも

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
兎	兎	兎	兎		兎	兎	兎	兎	兎	兎	兎	兎
兎	兎	兎	兎		兎	兎	兎	兎	兎	兎	兎	兎
兎	兎	兎	兎		兎	兎	兎	兎	兎	兎	兎	兎
兎	兎	兎	兎		兎	兎	兎	兎	兎	兎	兎	兎
兎	兎	兎	兎		兎	兎	兎	兎	兎	兎	兎	兎
党	党	党	党	党	党	党	党	党	党	党	党	党
党	党	党	党	党	党	党	党	党	党	党	党	党
兜	兜	兜	兜		兜	兜	兜	兜	兜	兜	兜	兜
兜	兜	兜	兜		兜	兜	兜	兜	兜	兜	兜	兜

しれない。驚いたことに文部省活字も同じ字体。

【兎】当用漢字表の手書き原稿では「兎」だったのだが、実際に印刷されたのは上記の字体。さらに当用漢字字体表で変更された。

【党】「党」と「黨」は本来は別の字。

【兜】上部の「白」を、2分割した「白(E+ヨ)」で挟む異体字が漢代からある。楷書の「房山雲居寺石経」は「白」の下に「白」を書く動用字。「白」を「北」で挟む字体もある。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
入	ニウ いる いれる はいる								
全	ゼン すべて まったく まったくし まっとうする								
八	ハチ やっ やっ やっ よう								
公	コウ おおやけ きみ								

【入】古代には「大」のような字体もあった。居延漢簡では「人」とかわらない書き方がある。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												入 現代中国
元暦萬葉①	節用	入0										
全												全 千祿<通> 現代中国
粘葉本朗詠	農家調宝記	入4			国定教科書					×		
八												八 現代中国
元暦萬葉②	江戸方角	八0										
公												公 現代中国
粘葉本朗詠	節用	八2										

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

【八】²⁴⁵⁶六共兵具

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期				
六	ロク むい むつ むつ												
共	キョウ とも												
兵	ハイ ヒョウ つわもの												
具	グ そなえる そなわる つぶさに												

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
六												六 現代中国
共												共 現代中国
兵												兵 現代中国
具												具 現代中国

【六】説文篆文の字体はちょっとおかしい？ 現代中国も「具」。

【兵】現在の字体で書かれるようになったのは、中国の南北朝期あたりらしい。

【具】中国の南北朝期以降は「具」ではなく「具」と書かれることが多い。干祿字書、九経字様、康熙字典、文部省活字、

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
其	キ その								王勃詩序
典	テン さかん つかさどる のり								王勃詩序
兼	ケン かねる かねて								王勃詩序
円	エン まるい まどか まる								鄭書指歸
圓									三十帖策子

【其】『説文解字』『甲骨文編』『金文編』に「其」では掲載されず、「箕」として掲載。『甲骨文編』『金文編』などをまとめた『古典文字字典』には「其」は「箕」の籀文とある。白川静は「其」は「箕」の元の字としている。

【兼】楷書では下部が「𠂔」になる字体が一般的。干禄字書の

序文には2種類の字体が使われている。
【円】「円」の字体は中国では使用例が見えない。日本では空海の「三十帖策子」に使用例があり、その後ずっと使われ続けている。「円」は「圓」の「員」を縦線に略してできた字体だと思われる。岩田母型製造所所有の弘道軒に「圓」の字体

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
其	其	其	其	其			其					其 現代中国
其	其	其	其	其								
其	其	其	其	其								
典	典	典	典	典			典	典	典	典	典	典 干禄<俗> 現代中国
兼	兼	兼	兼	兼			兼	兼	兼	兼	兼	兼 現代中国
圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓 現代中国

が見えない(明治期に「圓」の字体の使用例あり)。「圓」は楷書では「員」の「口」を「ム」または「△」に書く。これは四角の連続を避けて変化をつける意識が働いているのかもしれない。「口」を点2つに略すのは漢代から行われているが、「口」を点2つに略すのは鎌倉時代以降か。

